長期留学中の大学院女子留学生の語り
――断絶の感覚をうみだすもの――

鈴木　寿子・張　瑜珊

The purpose of this paper is to investigate how Chang, a foreign student in a long-term (nine-year) doctoral program in Japan, acknowledges her “felt sense” as guided by Suzuki using the TAE (Thinking at the Edge) procedure. It finds that for Chang a clear gap exists between her ideal self as an active member of society in her birthplace, Taiwan, and that of her (constrained, under-appreciated) real self in Japan. A second gap exists owing to a perceived unbalance between Chang’s efforts and how they are evaluated. This qualitative analysis clarifies Chang’s seemingly rootless identity and points to the possibility of establishing graduate education as a program for Sustainability Education which focuses on how to build a coherent identity so that graduate international students are able to think about the worldwide movement and a way of life at the same time.

キーワード：発達課題、TAE、浮き草的自己把握、持続可能性教育、留学生教育

はじめに

2009年現在、日本における留学生の数は132,720人[1]である。一口に留学生といっても、準備教育課程にある日本語学校生から、専門学校生、学部生、大学院生と在学段階は幅広い。2008年に留学生30万人計画[2]を策定した日本政府は、「大学院への留学生については、近年増加傾向にあることや、優秀な人材の大学院への受入れを重視する立場からも、一層留意していく必要がある[3]」として、大学院留学生の獲得に意欲を見せている。

2009年現在、大学院に在学する36,844人の留学生のうち、48.5％にあたる17,874人が女子留学生である[4]。2003年度の男子16,171人、女子12,737人（全体の44.1%）、合計28,908人[5]という数字と比較すると、総数が伸びているだけでなく男女差も縮まっていることがわかる。この背後にはグローバル化・女性の高学歴化という世界的な現象があると考えられる。人や資本の国境を越えた移動は容易になり、女性にとっても留学という選択肢が身近になってきたといえよう。留学生30万人計画を背景とした留学生数の増加が続いていく場合、大学院女子留学生も倍増することが予測できる。

本研究は日本における大学院女子留学生について考えるものである。まずは、日本における女子留学生に関する研究から見ていきたい。船木聡美（2003）は、従来の留学生研究が第二言語習得過程や異文化適応過程の研究に偏り、青年期にある発達主体としての留学生を見る視点を見落としてきたことを述

べた上で、中国人女子留学生のライフストーリーインタビューを実施した。その結果、対象者が対人関係やアルバイト、アイデンティティの模索に悩む青年期特有の課題を持っていることを指摘し、留学生に起きている問題を異文化接触・適応の問題に帰結させるのみでなく、個別の発達課題に留学生がいかに向き合っているかを見る意義を提言している。

女子留学生を発達課題に向き合う個人として考えると、学業・研究に取り組むアカデミック・ライフの他に、人生の重大な課題を抱えている存在であることが見えてくる。パトリシア・クラントン（Patricia Cranton 1992=1999）は、パトリシア・クロス（K. Patricia Cross 1981）が提示したライフサイクルにおける課題を紹介し、生き方が多様化している最近の女性のケースに当てはまるかどうかについては疑問であるとしながらも、「18～22歳：巣立ち（家族からの独立等が課題）」、「23～28歳：おとなの世界への移行（最初の人生構造を形作ること等が課題）」、「29～34歳：安定性への探求（長期にわたる目標を据え、努力すること等が課題）」などの局面におけるライフステージ上のでき事と、その発達段階で向き合うべき課題が関連していることを述べている（クラントン 1992=1999、p.52）。これらの指摘から、女子留学生を学業を遂行する主体であると同時に、恋愛、結婚、家族、仕事、人間関係などにおいても、各々の発達課題に取り組んでいる主体的存在として見る必要性が示唆される。

年齢によって展開するライフサイクルを考えれば、女子留学生を一括りにすることはできない。大学学部から修士課程、博士課程と進学を続けていく女子留学生は、学歴を更新していくと同時に年齢も重ねていくのであり、ライフステージ上の課題も変わってくることが推測できる。飛び級などの特殊な事情がない限り、博士課程入学者は24歳以上になる。留学生の場合、語学学校に通ったり、研究生になるなどの過程を経ることも多いため、入学時には30代になっていることも珍しくない。また、博士号取得を目的とした留学の場合、留学期間は博士論文執筆に至るまでの研究の進捗に左右されるため、学部生や修士課程の学生に比べて修了のめどが立ちづらく留学が当初の予測よりも長期にわたることもある。このように見ると、博士課程の女子留学生の留学とは、特に文系においては長期化することが珍しくなく、20代後半から30代前半を中心とするそのライフステージでは、脱青年期といえる成人前期の女性の課題と向き合うものであるといえよう。では、ライフステージ上の発達課題に向き合う上で「留学生」であることは、どのような意味を当事者にもたらすのだろうか。

そこで本研究は、留学生の中でも最高学歴に当たり、他の在学段階に比べ留学が長期化しやすいと考えられる文系博士課程に在学する女子留学生に着目する。第二筆者の張は、本学博士課程に在学する30代前半の大学院生（専攻は日本語教育）であり、第一筆者の鈴木と同一のゼミに所属している。台湾の大学を卒業後、「日本語専攻なので、自国の学位より目標言語国家のほうがいい」と思い2001年に来日、本学の研究生となった。その後、大学院修士課程入学・修了、博士課程進学を経て、2010年現在に至るまで約９年にわたって日本での留学生活を続けている。本稿では、博士課程に在学中の女子留学生である張に焦点を当て、当事者の声をすくいあげる。長期化する留学が個人にもたらす意味を明らかにすることで、今後増えると予測される大学院女子留学生に提供すべきサポートを考えるための一助としたい。

１．研究方法

当事者の認識を言語化・理論化するために、本研究では質的研究法・TAE（ティーエーイー、Think At the Edge：辺縁で考える）を用いる。TAEは、アメリカの哲学者・臨床心理学者であるユージン・

ジェンドリン（Eugene T. Gendlin 2004）が開発した理論構築法である。質的研究としてのTAEは、ジェンドリンの提示したTAEのステップの教示を基に、得丸さと子（2010）が質的研究法の分析手順として提案したものである。

ジェンドリンは、言語に先行する、身体的に感じられている意味をフェルトセンス（felt sense）と名づけている。TAEでは、意味は言語化される前にイメージや感覚であるフェルトセンスとして身体的に感じられているという見方を支持する。分析者がフェルトセンスに注意を向け、身体的に内在している感覚を手繰りつつ徐々に言語化し、理論を生成する方法がTAEである。留学生活のただなかにある張も経験を重ね、自らの留学生活に対するフェルトセンスを形成していると考えられる。この手法を用いることで、大学院女子留学生の張の経験が、当事者の問題意識を通して立ちあらわれてくると考えられる。そこで、これまでの留学生としての経験から得ている張のフェルトセンスを軸に分析を進める。

TAEのステップは、「フェルトセンスから語る」（ステップ１～５）、「側面（実例）からパターンを見出す」（ステップ６～８）、「理論を構築する」（ステップ10～14）という３部・14ステップに分かれている。それぞれのステップのインストラクションに従って進めることで、フェルトセンスから理論が生成されるように作られている。ここでの分析者は女子留学生のフェルトセンスを持つ第二筆者の張であり、分析対象となるのは張自身の留学生活にまつわるフェルトセンスである。TAE実施経験のある第一筆者の鈴木が、TAEのステップのガイド役として張の分析に同伴し聴き手となり、各ステップで張に対して思考が深まるような問いを適宜投げかけるなどの手助けをした。TAEのステップを実施するために、2009年12月13日から2010年２月10日までに４回、大学構内の教室にて各２時間程度のセッションを持った。セッションは録音記録された。

本研究の研究対象者である張は本稿執筆者の一人でもある。この点について筆者らは、Participatory Action Research（以下PAR、Tolman and Brydon-Miller 2001）の立場で進めていく。PARは社会的に抑圧下にある個人・コミュニティなどに焦点を当てる研究で用いられる方法であり、対象者を研究の一端を担う者として位置づける。研究内容に熟知した対象者と研究手法を身に付けた研究者によって研究を遂行することが特徴である。ただし対象者と研究者は研究手法と内容に関して役割を隔てず、互いの知見を協働的に吟味しながら研究を進めていく。本研究にあてはめると、TAE実施経験のある鈴木が研究手法を張に手引きし、対象者である張が、自己の留学経験に焦点を当て自身のフェルトセンスに向き合い、両者が協働で研究を進めた形になる。言い換えれば、対象者としての張がTAEという手法によって研究者の側の視座を得るのが本研究のスタンスである。研究結果は張の語りから生成されたものである。

なお、当事者の主観を重視した質的研究のデータへの取り組み方については、都合のよい事例を恣意的に選択したのではないかとの批判が「恣意性問題」（西條 2005a）として問われてきた。この恣意性問題について西條剛央（2005b、p.211）は「どのような関心をもつ研究者が、研究対象となるフィールドや人物にどのようなかかわり方をし、どのような視点から、どのような方法により、どのようなデータを取り、どのような観点からそれを解釈、分析したのかといったように、構造化に重要な影響を与えると考えられる諸条件を開示していく」ことによって広義の科学性が保証されるという立場を示している。この指摘からは、データ、研究プロセス、研究者がそれぞれ不可分であり、むしろ研究者の主観性や立場を前面に出すことにより、質的研究の恣意性問題を乗り越えていく道筋が示されている。そこで本研究では、TAEのステップを追いながら、フェルトセンスの保持者であり研究対象者である張とガイ

ドの鈴木のやりとりを示し、分析の様相を含めた研究結果を開示する。この点についてTAEは分析プロセスの開示に適した手法であると言える。それは、TAEではフェルトセンスを言語によって顕在化させながら理論構築していくステップそれ自体が分析であり、結果ともなるからである。また当事者としての経験によって培われたフェルトセンスの総体がデータとなるため、留学経験がどのように本人の中で価値づけられているのかが明らかになる。つまり、TAEを用いる本研究は、ステップごとに分析の透明性が担保されるため質的研究の恣意性問題に応え、かつ張の留学経験をエピソードとして可視化することで、長期留学中の大学院女子留学生の経験を当事者の目線で読者と共有することが期待できる。

なお、当該コミュニティや社会全体の変革に目標を置くPARに準じて、本研究の結果は、これまで十分な着目を得ていなかった長期留学中の大学院女子留学生の声を教育に反映させることを目指す。

２．分析手順

分析開始前からステップ11までの手順と共に、張が行った分析の結果得られた語や文、気づきを記述する。まず張は、これまでの留学生活をふり返り、印象的なでき事やこれまで感じてきたことを思い出しながら、明確に言語化できないが、身体的に感じられる「知っている感じ」を得た。この「知っている」という感覚がフェルトセンスである。

【ステップ１～５：フェルトセンスから語る】

ここでは、研究生、修士課程、博士課程と約９年間にわたる日本での学業生活を続けるなかで張が感じ取ってきたフェルトセンスの言語化を試みる。

〈ステップ１・フェルトセンスに形を得させる〉では、留学生活についての「知っている感じ」を意識しながら、一つひとつの語を確かめるようにして語や句を書き留めた。20分程度の時間を取り、挙げた語は以下のとおりである。

> 挫折（挫折したが、成長もした）、成長、経済的自立、（普通の人とちょっと違う生活を送ってきたから）脱線、世界が広がった、ケチ、最先端…

〈ステップ２・論理以上のものを見つける〉では、フェルトセンスが意味するものを既存の論理で説明しようとせず、まだ言語化されていない意味へと進んでいく。ステップ１で得た語句の中からいくつかの語句を選んで文を得た。その文とは、以下のようなものである。

> 自分は成長していると思っているが、他の人から見て、ルートから脱線している生活を送っているかもしれない。

「成長」という言葉で示される自己評価と、「ルートから脱線」したものと捉えられかねない他者評価との間にズレがあることがこのステップでは見えてきた。

〈ステップ３・通常の定義で使っているのではないことに気づく〉と**〈ステップ４・キーワードに意味させたいことを書く〉**は並行して進めた。ステップ２で得た「自分は成長していると思っているが、他の人から見て、ルートから脱線している生活を送っているかもしれない」の「ルートから脱線している」をキーワードとし、この部分に入れられそうな他のキーワードを探し、辞書を引いてその語の辞

書の意味を確認した。この作業により、既存のことばの意味と、言葉では表しきれないフェルトセンスとの間を往還し、よりぴったりしたフェルトセンスの感覚をつかんでいく。例えば「脱線」には、辞書の語義では「線路から外れる、話や行動が横道にそれる」という意味があるが、張にとっては「成人として負うべき責任[6]を果たしていないこと」という意味が込められており、留学生活が張にとって「責任」の感覚を引き起こすものであることが示唆された。

他のキーワードとして、「他の人から見て華やかな留学／楽しい留学を送っているかもしれない」が選ばれた。それぞれ辞書に「(華やか) 花のように美しい。際立って鮮やかなさま」、「(楽しい) 満足で愉快な気分。豊かである」などの積極的な意味がある一方、張は「(華やか) 飾り物のような感じ」、「(楽しい) 苦がない」というイメージを持っていた。張のフェルトセンスで捉えられた留学生活は、他者から見て華美な印象である一方、空虚さや現実性の欠如とも関連が深いことがわかった。

〈ステップ５・キーワードに意味させたかったことを拡張する〉では、これまで出てきた語を整理して、以下のように一文に表わした。

> 自分は成長していると思っているが、他の人から見て、【ルートから脱線している、華やかな、楽しい生活…】を送っているかもしれない。

【ステップ６～９：側面（実例）からパターンを見出す】

「側面」とは、多様な意味を含み込んだ多面体であるフェルトセンスを構成する実例（経験）である。また「パターン」とは、「側面」が示すところの意味を、抽象度を上げ、一般的な表現で言い表したもの（他の実例にも繰り返し現れる可能性のある特性）である。得丸（2008、p.67）はイソップ物語の寓話『うさぎとかめ』を一つの実例として見たとき、他のストーリーにも現れる可能性をもつパターン「油断大敵」が取り出せることを例示している。

ステップ6～9では、データから側面を選び出し、そのパターンを言い表していくことで、分析テーマである留学生活の本質を言語化していく。

〈ステップ６・側面を集める〉では、張の留学生活での多様な経験の総体の中で、本質的であると感じられる例（実例）を４つ集めた。**〈ステップ７・側面の詳細な構造を見る〉**では、ステップ６で選んだ４つの実例からパターンを抽出した。

例えば実例１では、張が来日１年目、研究生として受験した修士課程の入試に不合格となってしまったことを述べている。この実例の、他の実例にも当てはまると思われる特質は何かとガイドの鈴木が問うたところ、張は「努力すれば報われるというわけではない」というパターンを見出した。これがパターン１である。

> **【実例１】**研究生１年目の時に、すごい一生懸命勉強していた。で、自分の勉強したノートでも、他の人に借りられるくらいに取っていた。でも（自分は落ちて）彼女が受かった。(彼女は) あまり学校にも来なかったというのがあって、なんで一生懸命勉強した私が受からなくて、彼女が受かったかというのは、不思議に思っていたことがある。そのときに、努力は必ず身になることが信じられなくなったことがあった。
> **【パターン１】**努力すれば報われるというわけではない

同様に、実例2、3、4とそれぞれのパターンを示す。

【実例２】他の留学生より、自分は研究以外のこともたくさんやっていた。（中略）（研究の）環境が良くて、自分も（研究や研究以外のことに）関わっていくことが好きなんだ。（鈴木：それは自分の中でプラス評価？）うん、プラス。例えば、事務の仕事をやったりすること、やった時に自分も事務能力があって、外で就職しても何とかできる（とわかった）ことはプラス評価。例えば、教えること以外にも、できる自分がここにいる。
【パターン２】多方面のことに関わることによって、自分を知る

【実例３】明日のお金を何とかしなければということはない。年単位で考えているから。この１年だいたい大丈夫。次の１年は、前の年の１年に貯めておく。来月の家賃はどこから、ということは悩んだことがない。（中略）留学、最初の時期に、奨学金が誰がもらえて誰がもらえないということについて、かなり気になっていたことがある。（中略）日本に来てから、ショッピングしなくなったという感じ。最初に日本に来ていた時は、物価が高くて、服が安く買える時代ではなかった。台湾の物価との差の慣れができていないから、何でも高い感じがしていた。
【パターン３】留学生活はお金が大事

【実例４】留学時間が長い。そんなに長くかかるとは思わなかった。最初、親に留学しに行くと告げた時、研究生プラス修士だけで戻ってくるという話だった。（実際は）研究生プラス１年で（研究生２年間、修士課程２年間で合計）４年も使った。やっと修士終わって、博士も受験して入れたから、親は複雑な気持ち。「そんなに勉強しなくてもいいじゃない」ということを思っているけど、でも、博士進学できたということも、一種の誇りというのがあるので、卒業してほしい気持ちもあるという感覚で、博士今５年終わったね、終わろうとしているから、こんな長く時間がかかるとは自分も思わなかったし、親の方も思わなかった。
【パターン４】留学していると時間感覚がなくなる

〈ステップ８・側面を交差させる〉では、ステップ７で抽出した４つのパターンを相互に交差させ、フェルトセンスと応答させながら、新たに浮かび上がってくる知見を書きとめた。交差とは、一つの側面を他の側面から見ることによって、新たに見えてくるものについて思考をめぐらすことである。この作業では、パターン１とパターン２の交差、パターン１とパターン３の交差、というように順次、同じパターン同士以外の組み合わせを検討した。つまり、４×３で12の組み合わせを行った。得丸（2008、p.78）は交差を「めがねをかけて見る」という比喩を用いて説明している。つまりここでは、パターン１をパターン２に適用する場合、「パターン１というめがねを通してパターン２を見る」ことになる。例として、パターン１「努力すれば報われるというわけではない」とパターン２「多方面のことに関わることによって、自分を知る」の交差では、「他の研究や事務の仕事をたくさん手伝っていても（多方面への関わり）、博士を早く修了することと直にはつながらない（努力が必ずしも報われない）」という洞察が得られた。

このように２つのパターンを重ね合わせることで意味の奥行きが表現されていった。作業では順が異なる組み合わせ、例えばパターン１×２とパターン２×１を両方行っているが、ここでは紙幅の関係上、前者のみ提示する。

パターン１：努力すれば報われるというわけではない パターン２：多方面のことに関わることによって、自分を知る パターン３：留学生活はお金が大事 パターン４：留学していると時間感覚がなくなる	
１×２	他の研究や事務の仕事をたくさん手伝っていても、博士を早く修了することと直にはつながらない。
１×３	奨学金審査システムに疑問を持っている。一人ひとりをちゃんと見ていない。（鈴木：どうしてそう思うの？）努力が報われないんだよね。もらえる、もらえない人の基準がわからないから、努力する、しないとか、本当にもらえる人なのか、というのを時々疑問を持っていることはある。
１×４	（自分は）いつも努力している。努力していない時もあるんだけど。何かを追求したいから努力をしていると思うんだけど、それを追いかけるとき、その時間が経っていることがわからなくなる。
２×３	いろんなこと、勉強以外のことをする。いろんな事の中にアルバイトもたくさん入っているから、なぜか、自分がお金に対して執着の気持ちがあるんですね。（中略）中国語の先生[7]とか、日本語学校の先生とか、１時間３、4000円もらえる仕事をしたことがない。いつも１時間1000いくら。2000になったこともない。（中略）まだそこまで評価されていない気持ち。
２×４	他の研究と、事務とかの仕事をしていたら、時間感覚もなくなる。いつになっても自分の研究に戻れないという時間の感覚。何カ月もかかってしまったかということを時々ふと思って。何カ月を自分の研究に使えたら、という気持ちもある。
３×４	去年までは、いつも、次の年度の生活費を準備している自分がいた。（中略）もう（博士課程に在学可能な期間が）あと何年しかないということからすると、そんなに何年後の（お金を）用意するのではなく、今現在早く学業を進めたほうがいい。

〈ステップ９・自由に書く[8]〉は、ここまでのステップで感得されたことを自由に語って一度整理するステップとして位置づけられている。そこで張は、ここまでのプロセスを経て新たに浮かび上がってくる思いを語った。抜粋を以下に提示する。

最初、「ルートから脱線」というキーワードを出したと思うんだけど、当時（ステップ２でキーワードを挙げたとき）のイメージというのが、なんか、自分が今の年齢になっても結婚していないし子どもを産んでいないし仕事していないという、みんなからの生活と違う（という意味）だったんだけど、さっき話していて、留学することは、もう自分の成人としての成長というか、ぶちっと切れている理由、原因になっているのかなあ。だからたぶん、台湾で生活するときにもっと周りの親とか社会とかから感じるプレッシャーがもっと大きいかもしれない。今の年齢になって、まだ何もできていないということが、大きく感じていたかもしれないんだけど、日本にいるので、そこをシャットダウン（停止状態に）できる。言い訳にすることもできるという感覚がある。で、（台湾から）離れることがもう本当にその時間の流れがない感じがある。自分の成長というか、成人としての成長がないんですね。

下線部に着目する。張は、結婚や出産、就職などの社会的期待に、留学中であることを「言い訳にすることもできる」ということを感じている。しかしその言い訳によって自分が楽になるわけではない。「ぶちっと切れている」、「シャットダウン」などの言葉を使いながら、「離れることがもう本当にその時間の流れがない感じがある」、「自分の成長というか、成人としての成長がない」として、台湾にいたらできたはずの成人としての成長が、日本で留学中の自分には感じられないことが苦痛になっていることが語りから読み取れる。

> いつか帰る、というイメージがあるから、日本はあくまでも留学期間という認識で思っているかもしれない。日本で恋したりすることを考えないわけではないんだけど、でも、これからのことを先に考えてしまうんですね。たとえば、結婚しようとしても、台湾に帰れなかったらどうしようということを考えてしまうから、日本人と付き合うことは躊躇する。今はちょっと、留学生以外の生活はないね、Aさん（筆者注：日本留学中に結婚したゼミの仲間）のように。でもイメージがないね、結婚して留学するイメージがない。留学プラス家庭生活というイメージがない。

「いつか帰る」と語る張は、博士号取得後の帰国を前提として留学を続けている。張は、「結婚しようとしても、台湾に帰れなかったらどうしようということを考えてしまう」、「留学プラス家庭生活というイメージがない」と述べ、今日本にいる自分は留学生としてのアイデンティティを背負っていることを強調した。

【ステップ10～14：理論を構築する】

ステップ10からは理論形成に入る。これまでのステップを経て張が保持しているフェルトセンスで用語（ターム）を選出し、概念としていく。

〈ステップ10・タームを選び、相互に関連づける〉では留学生活に見出される意味を端的につかむために、ステップ１から９までに既出し、張が重要であると感じた語の中から３つのターム（仮にA、B、C）を選び出し、張の日本留学経験が一つの構造体をなすように、A、B、Cの語の関係を探っていく。これまでのステップで使用してきた語、句、パターンを通覧し、最も重要に感じる語句を検討した結果選ばれたのは、「責任」、「努力」、「評価」である。この３つの語の関係性を明らかにするため、ステップ10では、「AはBである」に語句を補足して文を作った。同様に「BはCである」、「CはAである」も行った。この作業で得られた語りを下に示す。

AはBである：「責任は努力である」
学生をしていることの責任は学業への努力である。学業への努力。他のものは考えなくていい。免除、許される、その努力も、本当に勉強だけ。学生をしている責任というのは、学業への努力である。努力を必要とする。絶対していなければならない。他のことをしなくていいという免罪符。

学生が果たすべき責任は、学業への努力を見せることであると張は語った。またその責任は、同時に「他のことをしなくていいという免罪符」にもなるという。

BはCである：「努力は評価である」
努力している人間は評価すべきである。努力は必ず報われるわけではないということに対して不満を感じている。評価すべきだ。

ここでいう「評価」とは、プラスの評価を与えることである。張はステップ８で、奨学金の選考について「努力が報われないんだよね」と語っている。ここでも「努力している人間は評価すべきである」と、評価される側は評価を切望していることを述べた。

CはAである：「評価は責任である」
目下の人間を評価することは上の人間の責任である。学生を評価するのが先生の責任というのは、学生が努力しているから、上下関係という、親、子ども、上司と部下、という感覚からだと、下の人が何か努力をしているときに、上の人がちゃんと評価すべきだという。

評価は責任であると述べることに、留学生としての張が持つ評価への期待が示されている。ここでは評価する側の視点から、評価は努力への代価であると張が考えていることが読み取れる。

次に〈**ステップ11・ターム間の本来的関係を探究する**〉では、A、B及びCの関係をさらに深く考えてみるために「Aは本来、Bの性質を持っている」の文に語を当てはめてみて気がつくことを整理した。

Aは本来、Bの性質を持っている：「責任は本来、努力の性質を持っている」
責任を果たすには、努力しなければいけないから。

先のステップ８で「いつも努力している」と張は語ったが、努力者としての自負がここにも表れている。張の考えによると、責任は簡単に果たせないものであり、責任を負う以上、努力は必須であるという。

Bは本来、Cの性質を持っている：「努力は本来、評価の性質を持っている」
努力している人間を評価しないとかわいそう。その努力というのは、自分のためより他人のため。だから評価を求めている。（中略）努力していることをアピールする。努力していますよ、だから評価を下さいというのを感じている。（鈴木：努力は他人のため？）自分のための方がいいんだけど、自分にとって、努力している自分を見てもらいたい。だから評価を求めている。

「努力している自分を見てもらいたい」という語りが端的に示すように、努力の自覚とそれに対する他者からの評価の痛切な希求が、語りの全編を通じて現れている。

Cは本来、Aの性質を持っている：「評価は本来、責任の性質を持っている」
資本主義と共産主義の感覚。評価を与えないと、人が怠けたり、努力しなくなったりしていくから。だから、しなければいけない責任。（鈴木：評価は義務？）義務。

評価を与えることが責任であるという主張が、「資本主義と共産主義」の社会構図になぞらえて示された。ステップ10でも、評価は努力に与えられるべきものであるという張の認識が示されたが、ここでは、評価者が適切に与えられることにより、人の努力が機能することが加えて説明された。

以上のステップにより、張が捉える留学生活の構造を説明する準備が整った。以下、**〈ステップ12・最終的なタームを選び相互に組み込む〉**で現れた結果に沿って述べていく[9]。

３．結果

TAEでは、重要語の相互組み込みを以て理論構築とみなす。ここで選ばれた語が概念となる。下の四角の中の【】で示した語、【断絶[10]の感覚①】、【断絶の感覚②】、【責任】、【評価、】【努力】、【天秤①】、【天秤②】、【時間】、【馬鹿努力】が概念である。概念を相互に関連づけると、二重の【断絶の感覚】と【天秤】の構造により、理論が立ちあがった。

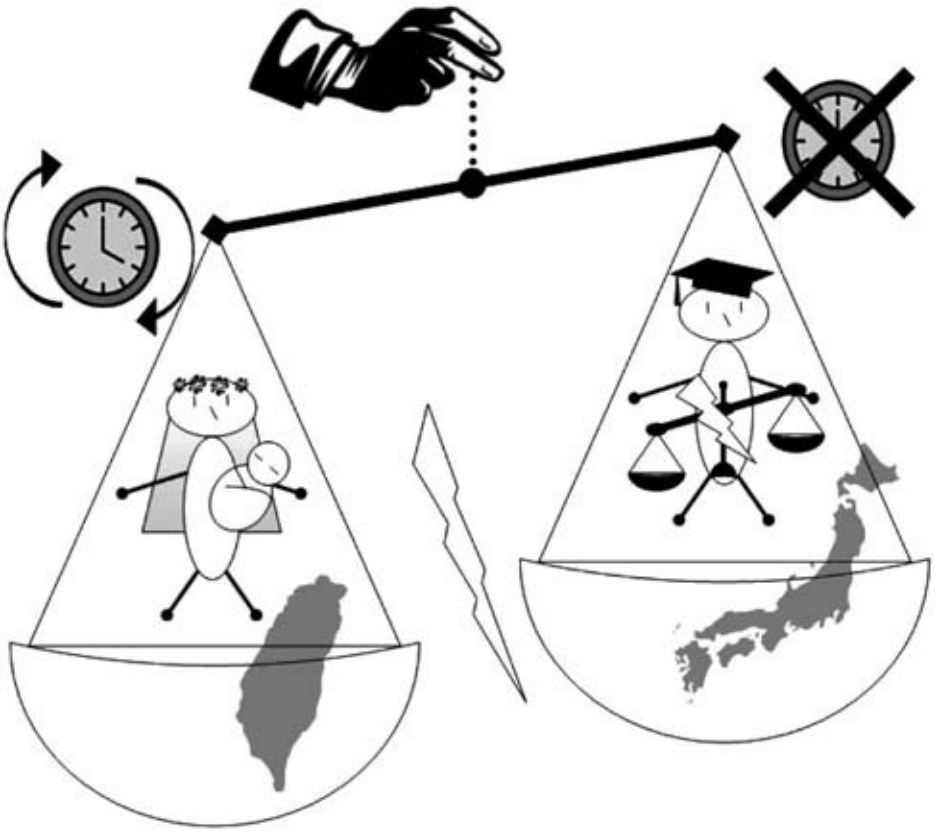
・断絶の感覚

台湾にいる仮想の自己と、実際に日本にいる自己の間に【断絶の感覚①】がある。同様に、努力と評価の間にも【断絶の感覚②】がある。前者は、成人としての【責任】を果たし社会との関係を得たいのに、日本にいるためにそれができないという感覚である。後者は、学生としての自己は【努力】しているのに、努力が【評価】に結びつく手ごたえが得られない感覚である。

・天秤の構造

日本で留学生活を送っている自分自身と、同じ時間を台湾で生活していた仮想の自己が、【天秤①】の両皿にかけられている。一方、日本で学業に励む自己は【努力】と【評価】を両皿に載せた【天秤②】を持っている。努力は必ずしも評価につながらないため、空回りし、留学の【時間】が【馬鹿努力（張の造語で、報われない・評価に結びつかないといった効率のよくない努力)】のように思えてしまう。

構築された理論は張によって下図のような構造図に示された。



構造図

この構造図に示されているのは、天秤の両皿に置かれている二重の自己である。

まず向かって右の皿から見てみよう。この図に描かれている日本留学中の現実の自己は、学生としての努力の責任を感じている。惜しまずに努力すべきだと思う一方で、自己の努力に見合う評価を受けることができなかったとき、自己がやっている努力が空回りしてしまったという気持ちを禁じえない。また、学位取得までにかかる時間が不透明であり、ゴールに近づいているという感覚が薄い。

一方、左の皿の上の台湾にいる仮想の自己は、30代女性としてのライフステージのイベントを次々にこなしている。就職、結婚、出産を経て、家族の期待に応え、公私ともに社会的責任を果たしている。仮想の自己は、現在の自己がいる日本とは物理的に断絶されており、それだけに、台湾にいる仮想の自己が達成していることが現在の自己には「重く」見え、天秤は左に傾いている。

張はこの構造図を得て、日本留学中の自己の成長を気にしていたことを再認識したと述べる。以下、この構造図についての張の語りを引用する。

【断片①学位か結婚か】ある先生が言っていた言葉は、最初はわからなかった。その先生は「どちらかを必ず手に入れなさい」、そのどちらかっていうのが、「学位」か「結婚」か。最初はどうして先生がこんな言葉を、こんな話をするかっていうのが、結婚イコール幸せということが、最初同意できなかった、気持ち的には。先生が言っている言葉に対して。（しかし）結局、自分は結婚していないことを、悔いのように（感じているようである）。構造図のように現れてきている感じがびっくりというか。気にしている、やっぱり。今は学位もまだ持っていないからどっちも手つかず状態。学生としての責任もまだ終わっていないし、成人としての責任も、まだいけない。

張は、結婚の幸せが学位取得の幸せと釣り合うかどうかについて「最初同意できなかった」と言う。しかし本心では、結婚し成人としての責任を果たすという選択肢は「悔いのように」くすぶっており、「手つかず状態」になっているという状況が再認識された。日本にいて博士課程に在籍している今は、成人女性として期待される課題に向き合うことができないと張は感じている。これらは今取りがたい選択だからこそ重く見え、天秤は「台湾にいる仮想の自己」に傾く。学業に打ち込むことに後悔はないが、努力が評価に結びつかないことへの焦りを感じている。

また、女性特有の、妊娠・出産の年齢的なリミットが、日本で学位取得のために使っている時間の中にも近づいてくる焦りを以下のように語った。

【断片②女性にとっての時間】時間がキーワード。女性に対してはね。時間というのはあるじゃん、男性よりたぶん気にするものだし、生理的にも人生のステージから考えると、男性のほうは、遅れても大丈夫のような感じがしているけど、女性には制限がある。子どもを産むか産まないかもあるし、年もとっていく。女性だと、年齢が増えることにつれ、女性としての魅力というか、男性に対してやっぱり落ちていくじゃん、ということをすごく気にしていると思う。だから博士の期間が長くなると、自分は何をやっているかということのむなしさ、そんな感覚。（中略）（このような感覚を自覚するようになったのは）30（歳を）超える感じかな。（社会からの期待を）気にせずに生きることは、最初はできると思ってたけど、こういう構造図が出てきたときに（わかったのは）、社会の中で生活している、社会の目線は気にしているなあという感じ。

女性としての時間を気にする感覚は留学当初から持っていたのではなく、博士課程に進学し、30代を迎えた頃から張は意識するようになったという。

博士学位を「諦める」という選択肢について、以下のように語った。博士課程に進学するまでに費やした時間の損失や労力が大きければ大きいほど学位を諦めがたく、現在の張は「諦めにくいステージ」にあるという。

【断片③博士学位を諦めにくい】留学生は自分で選択している。ただ、長期化している留学っていうのは、たぶんその諦めにくいステージに来ているから、これが出てきている。諦めることも当然できると思う。でも勇気を必要とすること。諦めたら自分がどう思うか、というのが出てくる。周りから「あなたは、なんでこんなに時間をかけたのに諦めたのか」というのも思うし、仕事に行きたくても同年齢の人たちと比べたら経験がない、ということも考えてしまう。

「諦める」決断の前に、「自分」と「周り」の眼を意識していることがわかる。また、学業・研究の世界から仕事の世界にシフトしようにも、「同年齢の人たちと比べたら経験がない」ということが、諦めることを困難にしている。

語りの最後に張は、今の自分の状況を、生まれ育った国を両親の都合で離れ、異国で生活を送ることを強いられた言語少数派の子どもになぞらえた。すなわち「全人格で生活」ができていない、「アップルート（uprooted：生まれ育った環境から引き離されている）」状態であるという。

【断片④自己の根が切断されている】留学しに来ていたら、学生の役割しか背負っていないような感覚がするから、全人格で生活しないといけないというのが大事。全人格があると、断絶とか出てこない。（鈴木：現代人のジレンマかもしれないですね）そうかもしれないね。言語少数派の子どもと同じ感じ？自分がやりたいことがやれない。海外にいるから。そういう制限が出てきたり。アップルートではないんだけど。（鈴木：根っこが断たれている感じかな。）だから帰るのかな、ルートがここにないから。長期で（日本に）いても、自分の根がここにない。

留学生がいかに日本生活に馴染んだとしても、「ルート（root）がここにない」という喪失感は、時間が解決する問題ではないことが示唆される。この語りから、張の問題が、異文化適応とは別のところにあることがわかる。

張にとって、現在の留学中の「自己」はいわば「浮き草」のように根を持たない者として認識されていることがわかる。本稿ではこれを「浮き草的自己把握」と名づける。考察では、これがどのように生まれているのか、「浮き草的自己把握」を打開するための鍵はどこにあるのかを論じていく。

４．考察

（1）断絶の構造：「浮き草的自己把握」はどのように生まれるか

本研究から明らかになったのは、留学生としての張が持つ断絶の感覚である。断絶は適応の問題から生まれているのではなく、いかに生きるかという当事者としての視点から生まれているものであり、この断絶の感覚が張の「浮き草的自己把握」を誘引しているといえる。留学生の視点から留学経験を捉えようとするとき、適応という観点からではなく、発達主体として見るべきという提言（船木 2003）は、張の語りを見ても妥当ということができるだろう。

２つの断絶の感覚、すなわち仮想の自己に対して出遅れている感覚（断絶①）や研究に対する努力が評価を得にくいこと（断絶②）が「浮き草的自己把握」を生み出しているとみられる。この断絶感がどの程度の大学院女子留学生に共通するものかは、別の調査が必要となろう。例えば留学期間の長さや、帰国意志の強さ、配偶者の有無にもよると想定できる。ここではひとまず、張と同様の特徴（長期留学中、強い帰国意志、未婚である等）を持つ大学院女子留学生に共通に見られる可能性のある現象として考えていく。

筆者らはここで、断絶①、断絶②を連動したものであると考えたい。断絶②は、研究が評価に直接結びつかないということだけでなく、留学生活が学業に一元化されがちになる傾向を示している。「現在の自己」にとって、時間の流れを意味づけるのは研究の進捗や評価であるということは、それ以外の時間の使い方が大学院留学生には想定されにくい状況にあることを裏づけている。断絶②が顕在化すれば

するほど、母国で順調にライフステージを進め、社会生活を営む仮想の自己イメージとの乖離である断絶①が深刻化するものと捉えられる。

では、大学院女子留学生にとって、断絶の感覚が生まれることはやむを得ないものなのであろうか。言いかえれば、留学中は生活が学業・研究に一元化され、自国に居住する仮想の自己との乖離が広がってしまうことを留学生は覚悟すべきなのであろうか。筆者らはそうではないと考える。それは学業以外の張の実践が、張に積極的な自己意識を与えているからである。張はステップ6で「教えること以外にも、できる自分がここにいる」と気づく機会として、「他の留学生より、自分は研究以外のこともたくさん」経験したことを肯定的に捉えている。しかし、張にとってこうした機会は限定的なものであり、生活の主軸である学業とは別のものである。張はまた、日本におけるアルバイト経験について「1時間3、4000円もらえる仕事をしたことがない。いつも1時間1000いくら。2000になったこともない。（中略）まだそこまで評価されていない気持ち」と語っている。母語や専門能力により様々なケースが見られるが、低い時給での労働しか経験できない張のような留学生が少なからず存在するということは、長期間の高等教育を受け、母語と日本語の高度な運用能力を保持している留学生の価値を、日本社会が正当に評価・活用できていないことを示す。それは留学生にとっては、受けた教育の成果を発揮し、専門的能力を社会の中でさらに磨いていく機会を得られないことを意味する。このことは日本社会、留学生双方にとっての損失であると言わざるを得ない。

逆に言えば、自己のリソースを活用できず、価値が正当に評価されない状況に起因する現状を打開し、学業・研究以外に多様な社会経験を積んだり、自己の能力を実践的に試していく機会を得ることで「浮き草的自己把握」を打開していくための道筋が見えてくる。

(2) 持続可能性教育：留学生教育が提供できるもの

「浮き草的自己把握」の背後にあるものとして指摘できるのは、学業・研究一辺倒になりがちな大学院女子留学生の生活であり、それはすなわち現在の大学院教育のことでもある。例えば筆者らの属する日本語教育の分野におけるカリキュラムは、論文の読み方や書き方、研究手法やデータの分析の仕方など、論文執筆能力の育成や研究の手続き的知識の獲得に力が置かれている。狭く深く専門の研究を行う一方、他分野の学問領域からの知見と合わせながら、現在の世界状況・社会に対し日本語教育がどのように貢献できるか、広い視野で日本語教育を考える機会は少ない。また留学生教育についても、異文化適応を促すカウンセリングのシステムは整備されていても、留学生が本来持つ文化的背景や能力の発揮できる環境をいかに提供するかという点からのサポートは乏しく、総じて大学院において、専門教育と絡めて世界の動きや自分の生き方を考える契機はほとんどないといえる。

では留学生に対して、大学はどのような教育を提供できるだろうか。岡崎敏雄（2009）は言語教育の立場から、人としての持続可能な生き方を追求する「持続可能性教育」のデザインであるアクロス・カリキュラム（アクロス・タイム・カリキュラム及びアクロス・フィールド・カリキュラム）を提案している。アクロス・カリキュラムでは、どのような生き方をしていくか、就職、子育て、中年期、高年期といったライフステージを横断して（アクロス・タイム）考えていくべきことを俎上に載せ、議論するプロジェクトを行う。例えば、20代での結婚・出産という規範は、筆者ら1970年代生まれの人間にとって「親の時代からの規範」として受け継がれ、依然として存在している。しかし、金融市場が世界規模で不安定化し、人々のライフコースの見通しが立てられなくなった現在、若年層は親と同様の人生設計

を描きづらくなった。そこで、規範を一旦措き、多分野にアンテナを張り、専門分野を横断して情報を集め、現在の世界状況がどうなっているかということと同時に自分の生き方を考えていく（アクロス・フィールド）ことが求められる。そのようにしてアクロス・カリキュラムでは、グローバル化を形作る経済、社会や環境・開発に関する教材を取り上げ、学生同士が意見を交わしながら、今後の自己の持続可能な生き方を模索していく。

アクロス・カリキュラムの教育目標は、世界で起こっている事象、そこに生きる人々との関連の中に自己の生き方を重ね合わせ、「世界はどうなっているか」、「そのような世界の中でどのように生きていくか」、「そこで人とどのような関係を作っていくか」、「私とは何か」の４つの問いを契機とし、「自己を起点として」持続的な生き方を築き上げていくことである。

試みに、本研究の結果を使って、アクロス・カリキュラム的に考えてみよう。二重の天秤の構造図は、留学の当事者である張が「自己を起点として」可視化した図である。張や、同様の境遇の女子留学生がどのように自らの持続的な生き方を考えていけるか、アクロス・カリキュラムの４つの問いをヒントに、図に当てはめて考えていく。

まず、「世界はどうなっているか」については、天秤が置かれている世界について考えてみることができる。天秤が左に傾いているのは、どのような価値観によるものなのか。現在の自己が存在する右側の皿が軽く感じられているのはなぜか。

「そのような世界の中でどのように生きていくか」は、天秤の左右が釣り合っていない状況でどのように生きていくかに相当するだろう。博士号取得まで辛抱し凌ぐか、あるいは早期帰国を考えるべきなのか。博士号を取得する／しないことは、今後の生き方にどのように関わるのか。

「そこで人とどのような関係を作っていくか」の問いに対しては、天秤の両皿の周囲にはどのような人がいるのか、どのような人との関係によって、その天秤の構造がつくられているのかを考えることである。

最後に、「私とは何か」を問うことは、このような天秤の皿の上の自己とはどのような存在であるのかを自問自答することである。アクロス・カリキュラムでは、これらの４つの問いを繰り返しながら、らせん状に自分なりの答えを構築していく。

持続可能性教育としてのアクロス・カリキュラムでは、このような自己を起点とした問いを他者との対話を経て各自が内省していく。問題はあらかじめあるものではなく、状況の中で何が問題となるのかを当事者が設定し、解決していくことを目指すものであり、浮き草的自己把握からの脱却に一石を投じることが期待できる。

おわりに

本研究の結果は、社会的期待と自己の意志との間で、「女性としていかに生きるべきか」の問いに悩む大学院女子留学生の姿を浮き彫りにした。物理的に母国から離れて生活している大学院女子留学生が「浮き草的自己把握」に陥りやすい環境にあることを留学生教育関係者は知っておくべきだろう。

筆者らは、「浮き草的自己把握」は、留学生に対する、あるいは広く大学院生に対する、張の内省からの問題提起と位置づける。張が本研究を通じて「浮き草的自己把握」を認識し、言語化して発信し得たのは、張自身が異文化適応を受け入れるだけの存在ではなく、グローバルな視点を持った「体現者・

肉声」のリソース（岡崎 2008）である証拠である。本論文に収めた語りや構造図は張によるものではあるが、「自分はどうか」と問いのベクトルを向けることにより、他の留学生や院生のふり返りの契機となり、自らの状況把握、問題設定に寄与することができる図であると筆者らは考える。

大学院で学問を修める女子留学生が、この問の議論を通じて、当事者が大学院入学前、在学中、修了後のアイデンティティを一貫させ、どのような生き方により、どのような可能性を追求できるのかを模索できるような、自己を起点とした思考の場の構築を教育現場には期待したい。

謝辞

お茶の水女子大学大学院の岡崎眸先生と三輪建二先生、ゼミ生の皆様、査読者の方に貴重なご助言やご意見をいただきました。感謝申し上げます。

（すずき・としこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
研究院研究員
ちょう・ゆさん／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科国際日本学専攻
博士後期課程）

掲載決定日：2010（平成22）年12月10日

注

1　日本学生支援機構「平成21年度外国人留学生在籍状況調査結果」（http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html）2009年12月発表。2010年８月28日アクセス。

2　文部科学省「留学生30万人計画」骨子の策定について：文部科学省」（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm）2008年７月29日発表。2010年７月11日アクセス。「留学生30万人計画」は、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指すものであり、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として位置づけられる。日本留学への動機づけや情報提供から、入試・入学・入国の円滑化、大学等の教育機関や社会における受入れ体制の整備、卒業・修了後の就職支援等に至る施策を検討し取りまとめたものである。

3　文部科学省「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめの考え方」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm）2008年４月25日発表。2010年８月28日アクセス。

4　総務省統計局「政府統計の総合窓口　学校基本調査年次統計」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001011528）2009年12月21日発表。2010年７月24日アクセス。

5　注４の資料参照。

6　何をもって成人として負うべき責任と考えるかは個人によって異なると考えられる。後日確認したところ、張はここで「（職業を持つ・家庭に入るなど）社会と関わりながら次世代につなげる義務を果たすこと」を意味している。

7　張によると、主に中国北部出身の中国人留学生は中国語（北京語）講師の職を得やすいのに対し、台湾出身の留学生は難しい。その理由は、北京語と台湾で話されている中国語とは、文字（北京語の簡体字に対し、台湾では繁体字）や発音記号（北京語で用いられるピンインに対し、台湾では注音符号）などに違いがあることによるという。

8　ステップ９のインストラクションは〈自由に書く〉であるが、ここでは記述する代わりにガイドである鈴木に対して語ってもらうようにした。

9　ステップ13、14は理論の拡張のステップであるため、本稿では省略する。

10　インタビュー中の語りでは「切断」の語が用いられた。その後、構造図の考案の段階で、「たちきること」と意志的に示される「切断」の語よりも、「つながりや結びつきが切れて絶えること」を示す「断絶」の語の方が張のフェルトセンスをより的確に表すことが確認されたため、「断絶」と示す。

参考文献

岡崎敏雄「持続可能性教育とその要としての言語教育のためのカリキュラム論――アクロス・カリキュラムのデザイン」『文藝言語研究、言語篇（筑波大学文藝・言語学系）』53号（2008）：pp.17-32.

岡崎敏雄『言語生態学と言語教育――人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社、2009年。

西條剛央「質的研究論文執筆の一般技法：関心相関的構成法」『質的心理学研究』４号（2005a）：pp.186-200.

――――.『構造構成主義とは何か――次世代人間科学の原理』北大路書房、2005年b。

得丸さと子『TAEによる文章表現ワークブック―エッセイ、自己PR、小論文、研究レポート…、人に伝わる自分の言葉をつかむ25ステップ』図書文化社、2008年。

――――.『ステップ式質的研究法――TAEの理論と応用』海鳴社、2010年。

船木聡美「異文化適応における発達的視点の導入：――中国人女子留学生のライフ・ストーリーの予備的分析」お茶の水女子大学心理臨床相談センター『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』５号（2003）：pp. 95-102.

Cranton, Patricia. *Working with adult learners.* Toronto : Wall & Emerson, 1992.（パトリシア・クラントン『おとなの学びを拓く：自己決定と意識変容をめざして』入江直子、豊田千代子、三輪建二訳、鳳書房、1999年）。

Cross, Kathryn Patricia. *Adults as learners.* San Francisco : Jossey-Bass,1981.

Gendlin, Eugene, T. “Thinking at the edge steps.” *The Folio: a journal for focusing and experiential therapy.19.1,* (2004):pp.12-24.

Deborah L. Tolman and Mary Brydon-Miller. *From Subjects to Subjectivities: a handbook of interpretive participatory methods.* New York University Press, 2001.